

## マルクスの変革の哲学

牧野 広義

(阪南大学)

この報告では、マルクスの「変革の哲学」を今日の「哲学」として再生させる意義を論じたいと思う。マルクスは、市民社会の解剖学としての「経済学批判」の仕事に全力を集中したため、彼は哲学の本格的な著作を残すことはなかった。その意味では確かにマルクスは「哲学の外部にポジションをとった」(田畑稔)と言える。しかし哲学とは世界と人間についての根本的な知の探求であるとするならば、マルクスには豊かな哲学がある。しかもそれは「世界の変革」を目指す哲学であるとともに、従来の哲学と対決し、これを変革する哲学でもある。この点をいくつかのテキストに沿って論じたいと思う。

### (1) 「フョイエルバッハに関するテーゼ」(1845年)

マルクスは、フョイエルバッハ『将来の哲学の根本命題』(1843年)と類似した叙述スタイルをとりながら、「新しい唯物論」の立場を述べた。第一テーゼでは、「これまでのすべての唯物論」の欠陥を克服して、「対象・現実・感性」を「実践として主体的に把握すること」を提起する。観念論は人間の「活動的な側面」をとらえるが、「現実的で感性的な活動」を知らない。フョイエルバッハは革命的活動の意義を把握しない。第二テーゼでは、哲学の重要な論争問題である真理論を論じる。第三テーゼは、エルベシウスらの「唯物論的学説」を批判しながら、環境の変化と人間の自己変革とを結びつける「革命的実践」の意義を述べる。第四テーゼは、フョイエルバッハの「宗教的な自己疎外」論を踏まえ、ここから「世俗的な基礎の分裂と矛盾」の解明とその「実践的変革」が論じる。第五テーゼは、「感性」を「実践的な人間的・感性的活動」としてとらえることを提起する。第六、七テーゼは、「人間の本質」は「その現実性においては、社会的諸関係の総体」であることを論じ、哲学的人間論の革新を提起する。第八テーゼは、「すべての社会生活は本質的に実践的である」とし、実践の概念的把握による神秘主義の克服を提起する。第九、十テーゼは、「古い唯物論」の「市民社会」(ブルジョア社会)の立場に対置して、「新しい唯物論」の「人間的な社会」の立場を提起する。第十一テーゼは、テーゼ全体を総括して、哲学者たちが世界の「解釈」にとどまったことに対して、「世界の変革」を提起する。

以上のように、各テーゼはそれぞれが一本の哲学論文となり、テーゼ全体は「世界の変革」と「哲学の変革」を提起す一冊の哲学書となる内容を含んでいる。

### (2) 『経済学批判』「序言」(1859年)

マルクスは革命的理論家としての自らの経歴を語りながら、経済学研究の「導きの糸」となった「一般的結論」を定式化した。この「序言」は、デカルト『方法序説』(1637年)に対置しうるマルクス自身の「方法序説」である。デカルトは自らの学問的経歴を語りながら、数学や自然科学の「分析的方法」や、「形而上学の基礎」などを論じた。それに対し

てマルクスは、社会科学の方法となる史的唯物論の基礎カテゴリーと、「社会革命」を論じた。そのさい、経済的土台における物質的な変革と、この衝突を意識し「闘って決着をつける」上部構造ないし「イデオロギー的諸形態」の意義を論じた。そして「大づかみに」、「アジア的、古典古代的、封建的、近代ブルジョアの生産様式」を、社会構成体の進歩の諸時期ととらえた。この議論は、世界史を「理念」の発展に基づいて、東洋世界、ギリシア・ローマ世界、ゲルマン世界（キリスト教・中世・近代）への進歩と論じたヘーゲル『歴史哲学』への批判でもある。そしてマルクスは、ブルジョア社会はその「敵対」を克服する物質的諸条件を形成して、「人間的社会」の「前史」となることを論じた。

### （3）『資本論』第一巻（初版 1867 年、二版 1873 年）

マルクスは第 13 章「機械と大工業」への注（111）の中で、デカルトやロックが「経済学の哲学者」となったという議論を紹介している。ではマルクスの「経済学の哲学者」とは誰か。その答えは「第二版の後書き」に見られる。マルクスは、自分がヘーゲルの弟子であることを認め、ヘーゲル弁証法の「神秘的な外皮の中にある合理的な核心」を継承する「批判的で革命的な弁証法」を論じた。マルクスは経済学批判の研究のさなかにも（1858 年 1 月）、ヘーゲル論理学における「方法における合理的なもの」を分かりやすく論じたいと述べたことがある。マルクス自身が「経済学の哲学者」なのである。しかもマルクスの哲学は「方法」の問題には限られない。今日、『資本論』からも「人間と自然の破壊」に対抗するマルクスの「変革の哲学」を再生させることが必要であると思われる。